

日本労働年鑑 第24集 1952年版

The Labour Year Book of Japan 1952

第一部 労働者状態

第四編 賃金と労働条件

第三章 労働災害と疾病

第二節 炭鉱の労働災害

災害死傷者数 鉱山産業における坑内作業はその自然的諸条件、特殊な作業環境のために災害率は他産業に比べて著しく高い。しかも、戦後の生産は荒廃した戦時中の固定設備のままで続行されたため、災害の発生は甚しく、年とともに頻発化している。すなわち、資源庁調査によると一九四六年における炭鉱の災害回数は五一、七六四件、同千人当り災害率一五一・八一であったものが、四七、四八年と増加し、四九年には災害回数、千人当り災害率はそれぞれ一六七、六五五件、三四〇・五四に達した(第112表)。

次に一九四九年における炭鉱の重要災害発生状況を示せば次の通りである。

罹災者数

県別	炭鉱名	月日	災害種類	死亡	重軽傷	計
福岡	大川	一、二八	ガス爆発	一	一八	一九
"	芳雄	二、二六	落ばん	四	三	七
福島	三松	二、二四	ガス爆発	三	三	六
山口	美福	三、二四	火薬類の引火	三	一六	一九
"	本山	四、九	落ばん	一	四	五
"	松浜	四、一四	炭車逸走	五	一	六
佐賀	楠久	六、二二	坑内出水	七	一	七
福岡	新入	六、二三	ガス爆発	一一	一	一一
"	高松	六、二四	落ばん	一	五	五
北海道	夕張	八、三	ガス炭じん爆発	六	七	一三
福岡	大峰	八、一九	落ばん	二	七	九
"	三池	九、七	落ばん	二	三	五
北海道	大和田	一〇、六	坑内火災	一四	二	一六
"	大夕張	一一、九	落ばん	三	五	八
茨城	高森	一一、一八	炭車逸走	一	七	七
長崎	大島	一一、二七	ガス炭じん爆発	九	二一	三〇
福岡	忠隈	一二、二	落ばん	一五	一	一五
山口	桃山	一二、八	坑内出水	七	一	七
熊本	魚貫	一二、一八	ガス爆発	一二	一	一三
茨城	海	一二、二三	自然発火	四	三	七
福岡	高松	一二、二五	炭車脱線	二	六	八

災害原因 次に炭鉱における災害の発生状況を坑内外別発生原因別にみると、第113表に示すごとく、坑内に圧倒的に多く、総件数の八八・八%を占めている。坑内では「その他」(自然発火、ガス中毒、工具のため、墜落、転倒、飛石または転石、踏抜き等)が総数の四二・三%に当る七〇、九〇五件、次いで「落盤又は側壁の崩壊」が三%、捲揚装置の故障、炭車の逸走脱線等「運搬関係」の事故によるものが一・二・六%で、これら三者が圧倒的に多い。坑外での最高は「その他」の八%で、次いで「運搬関係」の二・三%が目立っている。死亡および負傷の原因別をみると、死亡では「落盤」によるものが圧倒的に多く約三七〇人で死亡者総数の四五・三%を占め、次いで坑内「運搬関係」が一・八%で、以下坑内の「その他」、「爆発」、坑外の「運搬関係」の順となっている。なお負傷においても死亡とほぼ同様の傾向を示している。

日本労働年鑑 第24集 1952年版

発行 1951年10月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2000年6月1日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1952年版(第24集)【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
